

2017年03月06日 15:30

パーヴォ・ヤルヴィ&N響:マーラー交響曲第6番「悲劇的」(2017年2月22日・23日、横浜みなとみらいホール)

コンサート

👏 拍手



パーヴォ・ヤルヴィが指揮するN響横浜スペシャルは、直後に控えたヨーロッパ公演で披露するマーラー第6番を柱に、武満徹の《弦楽のためのレクイエム》を加えたプログラム。ツアー最初の2月28日ベルリンにおいてマーラーが演奏されるものの、まったく同じ組み合わせは3月6日のロンドン公演のみである。横浜へは当初初日だけに出かけるつもりであったが、2日目マチネの当日券が出るというので、都合をつけて両日とも聴いた。

2015年9月にベルリン音楽祭で聴いたアンドリス・ネルソンス&ボストン響の6番があらゆる点で衝撃的で忘れ難い演奏だったため、それ以降他の演奏でそれを上書きするには勇気が必要だった。しかし、今回はパーヴォ・ヤルヴィがN響とともにこの作品に新しい光を当てようとしていると思われたため、期待と緊張のないまぜになった心地で出かけることにした。

それというのも、コンサートの半年前の段階で当日のプログラム解説を執筆することになったとき、第4楽章のハンマーを3回叩く可能性があるとのことで、ハンマーが自筆譜の5回から2回に減らされ定着してした経緯と、これまでに3回叩かせた指揮者に関する記述を増やしたからである。その後、当日配付の冊子体の校正の際もハンマーに関する変更指示はなかったため、いよいよ3回かたスリリングな緊張感をもって臨んだ。

実はみなとみらいホールに出かけたのは初めてであった。座席によるのだろうが、結果から言うと、適度な残響を保つ一方で各楽器の音が独立してクリアに聞こえる素晴らしい響きをもったホールだと感じた。武満作品では、弦楽器の繊細な息づかいが肌に伝わってきた。

初日(22日):1階14列目。

録音機材に囲まれた指揮台。パーヴォさんの振りおろしたタクトに対し、かなりの緊張感が感じられる音で開始した。パートごとの拍節の取り方、個々の音にいささかの疵もなかったとは言えず、こちらが息を飲む部分もあったが、次第に落ち着いていった。肩を大きく上下に動かして指揮するマエストロ。

第2楽章と第3楽章の順序はスケルツォアンダンテ。2月20日にパーヴォさんは使用楽譜の写真をTweetしていた。それは2010年に出版された新全集の一步手前の版であった。新全集版ではアンダンテスケルツォの順であるが、それ以前の全集版はスケルツォアンダンテであるから、今回は使用楽譜の配列に従ったということではないだろうか。

そして問題のハンマー。本当に3回叩くだろうかと固唾を飲んで見守ったのであるが、結果的には大半の演奏がそうであるように2回であった。直前変更だった可能性もある。

初日は総じて、6番でマーラーが描いたある種の古典的枠組みが浮き彫りにされた演奏だったと思った。そして、それはN響の得意とする音楽づくりでもある。

2日目(23日):1階24列目。

初日のわずかな歯車のずれを見事に調整したというより、もはや圧倒的な訴求力をもった作品に仕上げてきたと言えよう。初日は舞台上も客席も、何やら只ならぬ張りつめた空気に包まれていたように感じたが、この日は緊張感を保ちながらも、強ばった空気はどこへといった風に、紡ぎだされる音楽は伸縮自在に我々を包んだ。作品の内包する凝縮されたエネルギーは次第に熱を帯びて爆発したかと思うと、自然なプロセスでやがて鎮静化する。ヘルデングロックン(舞台上手の袖)が唐突に描き出す異界は、均整のとれた楽曲構成の見取り図に見事に落とし込まれていた。

スケルツォとトリオは、それぞれの音楽的性格が非常に明確に際立って聞こえた。トリオでは、1小節ごとに交替する拍子がぎこちない拍節構造を生み出すが、それを逆手に取ったかのようなアゴーギクが実に絶妙。

第4楽章では、2回目のハンマー以降にパーヴォさんが創り上げた緊迫した流れは、我々聴く者を強く牽引する。しかし、そこに無理な強引さは感じられない。2日間計4回のハンマーは完璧なタイミングと破壊力であった。ラスト30小節余りの金管によるコーラールも、決して散漫に陥ることなく深く沈潜しながら音楽の内奥へと向かう。

2日間通して、首席福川さんをはじめとする9人のホルン奏者、そして首席菊本さんら

のトランペット、トロンボーン、チューバの金管群の水準の高さには脱帽した。2 日目に座った席では、偶然その場所がそうであったのだろう、木管・金管のベルアップが音色・音量をどう変化させ、どのような効果をもたらすのかを、これまでになく実感できた。

昔からたまに N 響の同一プログラムを 2 日連続で聴く事があったが、弦の第 1 プルトに首席が並び、管もベストメンバーが勢ぞろいした公演は、大変貴重な経験であった。舞台上に置かれていた録音機材が、将来 CD 化されることを意味すると期待している。

通常 N 響定期初日の演奏は FM で生放送されるが今回はなく、代わりに(?)、ベルリンのフィルハーモニーでのマーラーが 3 月 27 日午前 0 時(26 日深夜)からの BS「プレミアム・シアター」で 90 周年記念の 8 番と一緒に放映されるとのこと。横浜からさらにバージョンアップされたであろう N 響の演奏をベルリンの風景とともに観られるのが、今から楽しみである。→[放送予定](#)

自己紹介

専門は音楽学。特にドイツ語のテキストを伴った声楽作品が対象。聖徳大学音楽学部教授。musicology / Lied / opera / Gustav Mahler / german texts / University professor.